

# ふくしま道徳教育資料集

【小学校版】

きずな



福島県教育委員会

# この本を手にとったみなさんへ

かけがえのない命をもつみなさん。

家族や友達、先生、

さらに多くの人のつながりの中で、

みなさんは、生きています。

ここ福島で、今、時を過ごしているみなさんは、

この本から何を受けとめるでしょうか。

この本を読んで感じたことや、

そこから生まれた問い、思いを、

話し合ってみましょう。

今を共に生きる人と話し合うことで、

見えてくるものが、きっとあることでしょう。



福島県教育庁義務教育課長

佐藤 秀美



# 目次

(1)	きぼうの水族館 ～アクアマリンふくしま～	4
(2)	外国からのメッセージ	8
(3)	「はだかまいり」のはじまり	12
(4)	三本えだのモミジの木	16
(5)	クリスマスのおくりもの	20
(6)	「までい」の牛	24
(7)	おむかえ	28
(8)	ぼくたちの学校	32
(9)	がんばらやんばい	36
(10)	舞台 <small>ぶたい</small> の上で	40
(11)	私の誕生日 <small>たんじょうび</small>	44
(12)	ぼくのカブトン	48
(13)	たいこの音	52
(14)	あいづの三なき	56
(15)	こどもの日	60
(16)	ひまわり	64
(17)	アイナふくしま	68
	「ふくしま子ども宣言 <small>せんげん</small> 」作文コンクール作品集	71



# ふくしま道徳教育資料集

【小学校版】





## きぼうの水族館

### くアクアマリンふくしまく

「多くの命がなくなったことを考えると、ここで生きぬいた命をとにかく未来へとつなごうという一心でした。今でもその思いは変わらず、生き物たちに接<sup>せつ</sup>しています。」

飼育員<sup>しいくいん</sup>の津崎<sup>つづき</sup>さんは、あのときの記<sup>き</sup>おくをしほり出すように話し始めました。

二〇二一年（平成二十三年）三月十一日

福島県いわき市小名浜<sup>おなはま</sup>港にある「アクアマリンふくしま」の館内には、潮目<sup>しおめ</sup>の大水槽<sup>すいそう</sup>でのびのびと泳ぐ魚

たち、かわいらしく動き回る、ゴマフアザラシやトドなどの海獣類<sup>かいじゅうるい</sup>を見て、目をかがやかせる多くの来館者がいました。

午後二時四十六分

ゴオオーン！ ドドドーン！ バリバリバリッ！

地ひびきのようなはげしい音を立て、巨大なゆれが水族館をおそいました。福島県では観測史上最大<sup>かんそくじし</sup>の震度六弱<sup>しんど</sup>の地震<sup>じ</sup>が発生したのです。

「だれか助けて！」

「早く建物からにげろ！」

館内の電気は、地震によって全て止まり、来館者はきょうふにおびえていました。津崎さんたちは、トランシーバー<sup>かた</sup>を片手に、館



【津波でくずれたじゃの目ビーチ】

① 黒潮<sup>くろしほ</sup>と親潮<sup>おやしほ</sup>という二つの海流<sup>かいりゅう</sup>が交わる福島県沖の海を再現した水槽。

② アザラシ、トド、セイウチなどの生き物をまとめていうときの呼び名。

内に残された来館者の安全を確保<sup>かくほ</sup>するためけん命<sup>めい</sup>に誘導<sup>ゆうどう</sup>にあたりました。そして、来館者全員を津波<sup>つなみ</sup>の心配がない安全な高台に、ひなんさせることができました。

まもなく、津波の第一波が海岸線<sup>かいぎんせん</sup>に到達<sup>とうたつ</sup>しました。駐車場の車は次々に流され、建物の一階へ波がおし寄せてきました。何度もおそってくる津波のきょうふにおびえながら、津崎さんたちは、館内にいる生き物たちが心配で、なりませんでした。

三月十二日

生き物たちの確認<sup>かくにん</sup>作業が行われました。ほとんどの生き物は無事でしたが、電気や水道などのライフライン<sup>③</sup>の復旧<sup>ふつきゅう</sup>の見通しは立ちません。水槽の水をきれいにする装置<sup>そうち</sup>や温度を調節する機械は動きません。生き物たちの生活環境<sup>かんきやう</sup>は悪くなっていくばかりでした。そのうえ、燃料<sup>ねんりやう</sup>や物資<sup>ぶつし</sup>はとどかず、館内のえさもなくなってきました。

津崎さんたちは、ガラスごしに今でも手がとどきそうな生き物たちが、ただ死んでいくのを見ていただけでもできないことに、いらだちや情け<sup>なさ</sup>を感じていました。

「今、元気な生き物たちだけでも、自分たちの手で何とか助けたい……。」「飼育員のだれもがそんな思いから、今後の対策<sup>たいさく</sup>について話し合いました。」

「海獣類なら一週間はえさをやらなくても生きのびることができはるはずだ。」

「いや、生き物だってストレスがたまっている。あと一週間生きる保障<sup>ほしょう</sup>もない。すぐに他の水族館に助けを求めましよう。」

「しかし、受け入れてくれる水族館だって、準備<sup>じゆんび</sup>をする時間が必要になってくる。わたしたちの手で、このまま見守<sup>みまも</sup>っていくほうがいい。」

津崎さんは、生き物たちを救いたいと願う飼育員たちの話を聞いて、だまって考えていました。

③ 電気・ガス・水道など生活に欠かせない資源やせつび。

そのときです。福島第一原子力発電所が爆発したという情報が入りました。真っ青な顔をしている職員たちを見て、津崎さんは力強く言いました。

「今、大切なのは、わたしたちの手で助けられるかどうかではない。一つでも多くの命を救うために、すぐに他の水族館に助けを求めよう。」

しかし、物資も十分にとどかないうえに、放射性物質がふり注ぐ福島に、はたして助けが来てくれるのだろうか。

「運送会社へ問い合わせても、断られました。」

「あきらめるな。生き物を思う気持ちはどこの水族館もいっしょだ。信じて連絡を続けろ。」

「この状況で、本当に来てくれるのでしょうか。」

きびしい現実の前に、津崎さんたちの不安はふくらむばかりでした。

三月十六日

「わたしたちに救える命があるなら協力させてください。」

千葉県水族館の職員たちが、海獣類を引き受けにトラックでかけつけてくれました。

「千葉のみなさん、本当にありがとう。クララをよろしくお願  
④  
いします。」

「元気でいるんだぞ。必ず福島にもどしてあげるからな。」

その後、「アクアマリンふくしま」の生き物を助けようと、全国の水族館が次々に支援の手を差しのべてくれました。また、全



【千葉県へ運ばれるセイウチ】

④ にんしん中のゴマ  
ファザラシ

国の子どもたちからは、たくさんのおうえん  
の応援の手紙やはげましの折り紙などが寄せられました。津崎さんたちは  
さいかい  
再開にむけて夢中で働き続けました。

七月十一日

「うわあ。見て、見てよ！ ゴマファザラシの『きぼう』<sup>⑤</sup>が泳いでいるよ。かわいいなあ。」

再開した「アクアマリンふくしま」では、千葉県で生まれたゴマファザラシのクララの赤ちゃん『きぼう』  
が、復興のシンボルとして、多くの人々に笑顔と生きる勇気をあ  
ふっこう  
たえています。

「わたしたちにとって、水族館の生き物は全て子どももみたいな  
ものです。だから、できる限りの命を救いたかったんです。『わ  
かぎ  
たしたちに、たくさん感動とえがおをくれてありがとう。』と、  
水族館の全ての生き物たちに言いたいです。」

来館者のえがおをうれしそうにながめながらそう語る津崎さん  
の目には、なみだがあふれていました。

（「教材作成委員会」作成）



【再オープンでにぎわう館内】  
ざい

⑤ 千葉県の水族館で  
生まれたゴマファザ  
ラシ、クララの赤ち  
やん。千葉県の水族  
館の職員とアクアマ  
リンふくしまの職員  
が相談して、名前が  
決められた。



## 外国からのメッセージ

二〇一一年三月十一日、日本列島を大きな地震がおそった。

わたしたちの町では、こわれた家があったが、幸いなくなった人はいなかった。しかし、水道がこわれたり、食べ物も買えなかったり、しばらくつらい時期が続いた。

そんなある日、わたしはインターネットであの写真を見た。それは、外国の子どもたちが、日本のためにいのりをささげている写真だった。

「わたしたちは、あなたたちと共にいます。」

「日本の深い悲しみを、わたしたちも分かち合います。」

英語でそう書かれていると知って、自然になみだがあふれた。

「ほくらも一年前、同じように大きな地震におそわれました。そのときから、これまで強く支ええてくれたのは日本人でした。チリは日本に感謝しています。」

「台湾で大きな地震があったとき、日本は一番早く、最も多くの救援隊を送ってくれました。本当に感謝しています。今こそわたしたちが恩返しをする時です。日本、がんばれ。」

たくさんの国から、多くの人々のはげましがインターネットにあふれていた。世界中の人たちが、日本を、わたしたちを応援してくれていたのだ。

① チリで二〇一〇年に起きたマグニチュード八・八の大地震。

② 台湾で一九九九年に起きたマグニチュード七・六の大地震。大地震が発生した夜、日本の国際消防救助隊が最初に台湾入りした。

しばらくして、わたしはこんな新聞記事も見つけた。

東日本大震災について、中国のメディアは、「日本国民の『落ち着いた行動』が、中国全土に強い感動をあたえている。日本人は、なぜこんなに冷静でいることができるのか。」と報じているという内容だ。

また、他紙では、「日本人の冷静さが、世界に感がいをおたえている。」「東京では、数百人が広場にひなんしたが、男性は女性を助け、街にはゴミ一つ落ちていなかった。」と紹介していた。

中国のテレビが、被災地に中国語の案内があることを取り上げて、「自分たちがこんなに大変なときなのに、外国人にも配りよをわすれない日本人に、とてもおどろいています。」と紹介した。その報道を見た北京市の女性は、「すばらしい。日本人の中には『道德』の血が流れているのだと思う。」と日本の新聞に語ったそうだ。わたしは、「『道德』の血」と言われたことに「はっ」とした。

確かに、被害がひどい中、日本人は落ち着いて行動していた。テレビでも、家に帰れなくなってしまった被災者たちが、整列して笑顔で「ありがとう。」と言って、順番にご飯を受け取っている



【インターネットをのぞき込む私】

様子を伝えていた。

自分も被災しているにもかかわらず、がれきのかたづけの手伝いてつだをしている人もいれば、ひなん所でおにぎりやにぎっている人もいた。家族が津波でなくなったのに、行方不明ゆくえの人を心配している人もいた。

しかし、それらは、外国の人から見れば、おどろくことなのだ。

あの大震災から、一年半が過ぎた。

その間に、ひなんして人がいなくなった家にどろぼうが入ったというニュースを聞いた。原子力発電所が爆発した後、福島県の人たちに対して、心ない言葉をあびせる人たちがいたことも知った。

「日本人の中には『道徳』という血が流れている」とほめてもらったが、果たして本当なのだろうか。次々と流れてくるニュースに、わたしは、日本はどうなってしまおうのだろうかと考え込んでしまった。



【給水車に並ぶひなん者たち】



〔教材作成委員会〕作成

【外国からのメッセージ】



## 「はだかまいり」のはじまり

「がつ七か。きょうは、ぼくの まちの「はだかまいり」の ひです。」

ことしも おとうさんが さんかするので、ぼくは、おじいちゃんと いっしょに  
みに いく ことになって います。

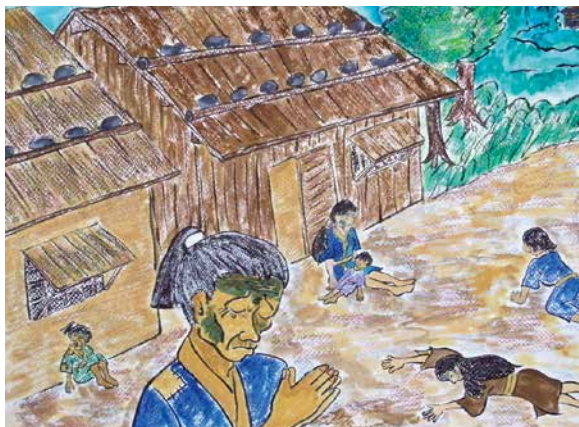
ぼくは、「はだかまいり」について ふしぎに おもって いた ことを、おじいちゃんに  
きいて みました。

「おじいちゃん、こんなに さむいのに、どうして、はだか  
おまいり するの。」

すると、おじいちゃんは、こんな はなしを して くれました。

いまから 千ねんせんくらい まえに、やないづまちに わるい  
びょうきが はやった。つぎつぎと ひとが しんで  
いくが、どうする ことも できないで いた。そのとき、  
こくぞうさまの ① こえが きこえて きたんだ。

「ただみがわの かめいしの おく ふかくに すむ



① やないづまちに  
あるふくまんこく  
ぞうせんえんぞうじ。  
にほん三だいこくぞ  
うその一つにかぞ  
えられている。

りゅうじんの ところから、ほうしょうのたまを ② もらって くれれば、びょうきは すぐに なおるだろう。」

ひとびとは、よろこんで、このたまを とりによく ひとを さがした。

その けっか、『やよいひめ』と いう うつくしく、 かしこい おんなの ひとが えらばれた。やよいひめは、 りゅうじんに ところからの おねがいを して、 ほうしょうのたまを うけとる ことが できた。

このたまを こくぞうさまに おそなえすると、あの こえの とおりに びょうきは なくなり、へいわが もどった。

ところが、それから しばらくして、「ほうしょうのたまが おしくなった りゅうじんが、たまを とりかえしに くる。しかも、一ねんで 一ばん しずかな しょうがつの 七かの まよなかに やってくる。」と いう しらせが とどいたんだ。

ほうしょうのたまが とられたら、また、わるい びょうきが はやり、たくさんの ひとが しんで しまう。ひとびとは、たいへん しんぱいした。そこで、ちからを



② でんせつのなかで りゅうじんが もつ ていたとされる た からのたま。



あわせて、ほうしょうのたまを まもる ことに した。

「ほうしょうのたまを まもれ。へいわと しあわせの たまを まもれ。」

この かけごえで ひとびとは あつまって きた。

いよいよ、しょうがつの 七かの よるに なった。

こくぞうさまからの いちばんがねが なりわたると、  
ひとびとは ふんどしひと一つの はだかすがたで、

「ヨイサ ヨイサ。」

と いさましい

かけごえを あげて、

こくぞうさまの ほんどうへと かけのぼった。そして、  
ほうしょうのたまを かこんで

「とられて なるものか。」

と おおごえを あげた。

りゅうじんは、ほうしょうのたまを とりかえそうと、  
かめいしの うえに、ぬうつと すがたを あらわした。  
ところが、こくぞうさまの ほうをみると、ひとびとの  
こえが、やまを うごかすほど なりひびき、たきびの





ひかりは、ひるよりも あかるく ひかって いた。

「これでは、たまを とりかえす どころでは ない。いちねんで いちばん しずかな こんやでさえ、このありさまだ。ふだんの ひは どんなに にぎやかなんだろう。ともかく こんやは だめだから、らいねん また くることに しよう。」

りゅうじんは こういって、ただみがわの おくふかく、しずんで いった。

こうして、りゅうじんが さって まちの ひとびとは、へいわを まもりぬいた よろこびの こえを あげた。

おじいちゃんの はなしが おわった とき、はだかすがたの おとうさんたちが、つぎつぎと、

「ヨイサ ヨイサ。」

と いさましい かけごえを あげながら、ほんどうへと かけのぼって いきました。

ほくは、その うしろすがたを みおくりながら、こぶしを ぎゅっと、にぎりしめていました。



（「教材作成委員会」作成）



## 三本えだのモミジの木

日曜日の朝、ぼくたちは町たんけん知った、「三本えだのモミジの木」を見に行きました。

ぼくたちがとうちやくすると、おじいさんがおでむかえてくれました。おじいさんは、毎日ここに来て、木々や生き物の世話をしていました。

「よく来たね。あの池のわきにある大きな木が、三本えだのモミジの木だよ。モミジの木のまわりには、いろいろな生き物があるんだよ。今朝早く、羽化したばかりのセミがいるから見てみるかい。」

友だちはみんなよろこんでいましたが、虫の苦手なぼくは、気が進みませんでした。おじいさんについていくと、モミジの木の根元



三本えだのモミジの木  
田村市竜根町のあ  
ぶくま洞近くの五  
郎ヶ池にある樹齢  
百二十年のモミジの  
木



① こん虫が、さなぎから成虫になると。  
セミは、ふつう暗いときに羽化しますが、気温がひくいと日中でもとび立たないときがある。

に、羽化してまだとび立たないセミがいました。

「わあ、きれい。羽が光っているね。」

「ほうせきみたいだね。」

とみんなは大よろこびでしたが、ぼくはみんなの後ろから、そつとのぞくのがせいいっぱいでした。

おじいさんは、やさしいえがおでモミジの木を見上げて、

「このモミジの木は、百二十年も生きつづけているんだ。わたしが子どものころは、この木に登ってよく遊んだものだ。この木は、わたしに自然のすばらしさをたくさん教えてくれたんだよ。」

池のほとりにある大きな三本えだのモミジの木は、空にむかって両手を広げたように立っています。おじいさんは、

「でも、年月がすぎると、竹やぶが広がり、土地はどんどんあれてしまった。『このままではモミジの木がかわれてしまう、なんとかしなければ……』と思ったんだ。そこで、このモミジの木を守りたい一心で、あれた土地をせいびすることにしたんだ。そうすると、くぼ地にひとりでに水がたまりだして、大きな池ができたんだよ。」

おじいさんの目が生き生きとかがやき出しました。

「池ができると、モミジの木もどんどん元気になった。その後、そのまわりにたくさん  
の生き物が集まるようになった。夏が近づくと、モリアオガエルがたまごを産み、夜には、



②  
モリアオガエル

たくさんのホタルがとび回るようになったんだよ。」

気がつくど、ぼくは身を乗り出すようにしておじいさんの話を聞いていました。

「それがね、東日本大しんさいで池につながるほりがうまってしまい、たくさんいたホタルがへってしまったんだよ。」

「えっ、かわいそう。ホタルは、もう見られないのですか。」

「わたしはね。どうしてもホタルをふっかつさせたいと思ったんだ。ホタルを見守ってきたモミジの木もがっかりするだろうからね。ほりを元のようにしたら、ホタルがまたふえてきたんだよ。」

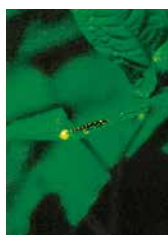
「ホタルの命いのちが守られてよかったですね。」

ぼくたちの言葉ことばに、おじいさんはえがおで、

「あの大しんを乗りのこえて生きつづけているホタルは、とても美うつくしく光っているんだ。クロマドボタルというめずらしいホタルもいるので、また見においで。」  
とうれしそうに話してくれました。

三本えだのモミジの木に目をやると、モミジの木が両手を広げて、たくさんの命をつつみこんでいるように見えました。

おじいさんの話を聞いて、ぼくは、「あのセミも地じしんにたえ、今日やっと地上に出てきたんだ。」と思い、モミジの木も虫たちも、一生けんめい生きていることに気づきました。そして、もう一度モミジの木の根元ねもとのセミを見ました。



③ クロマドボタル

「ぬけがらにつかまったままじっと動かないセミは、とび立つ日をどんなに楽しみにしていたのだろう。」

とうめいにかがやくセミの羽は、太陽の光が当たり、キラキラとかがやいていました。ぼくは、すき通る羽を持ったセミにいつまでも見とれていました。



〔教材作成委員会〕作成



## クリスマスのおくりもの

① あづま山のちようじょうに雪がつもり、二〇二一年がもうすぐ終わろうとするころ、<sup>②</sup>県庁職員<sup>②</sup>の吉田さんは、<sup>①</sup>県庁<sup>①</sup>に来た、たくさんの手紙の仕分けをしていました。すると、京都<sup>きょうと</sup>からとどいた手紙がありました。ふうとうの中には三まいの手紙と何まいかのおさつが入っていました。

一まい目の手紙は、えんぴつで力強く書かれていました。小学四年生の女の子、あかりさんからの手紙でした。

サンタさんへ

今年<sup>ことし</sup>は、大しんさいがありました。そして、今でもたくさんの人たちが自分たちの家でくらすことができないままです。食べるものも、生活にひつような物も、何もかもつなみに流<sup>なが</sup>されてしまつて、今のわたしたちとは、まったくちがうくらしをしていると思います。

わたしは、クリスマスでプレゼントがもらえてうれしくなりますが、しんさいにあわれた人たちは、「やった！ おもちやがもらえた。けれども家も食べ物もないな。」という気持<sup>きもち</sup>ちになるかもしれませ  
ん。同じ日本人なのに、わたしたちだけずるいような気がしました。

だから、わたしは今年、プレゼントはいりません。そのぶん東北<sup>とうほく</sup>の子どもたちにたくさんプレゼントをあげてください。おねがいします。そして、わたしが東北の人に書いたお手紙をわたしてほし

① 福島市の西がわに  
つらなる山々。  
② 県の役所につとめ  
る人。

いのです。どうかサンタさん、よろしくおねがいします。

あかりより

二まい目は、あかりさんが東北の子どもたち  
にあてた手紙、三まい目は、あかりさんのお母  
さんからの手紙がそえられていました。

あかりさんの家では、クリスマス間近になる  
と、自分のほしいプレゼントを手紙に書いて、  
まどにはっておくのだそうです。

ところが、今年のあかりさんの手紙には「自  
分のプレゼントを東北の子どもたちおくに送ってほ  
しい」と書かれていました。これを見たお母さ  
んは、なんとかしてあかりさんのねがいをかな  
えてほしいと、県庁にあかりさんの手紙を送っ  
たのでした。お母さんの手紙の最後には、「サ  
ンタクロースが、福島をはじめ東北のみなさん  
のところへ、幸せをとどけてくれるように、わ  
たしたちも遠くからいのっています。」と書か  
れていました。

吉田さんは、会ったことのないあかりさんの



ことを思いうかべました。

福島から遠くはなれた京都で、一生けんめいサンタさんと東北の小学生に、手紙を書いているあかりさんのすがたや、それをそっと見守っているお母さんを思いうかべました。

吉田さんは、まわりの職員にこの手紙を見せて、どうやってあかりさんのねがいをかなえてあげられるか、相談そうだんしました。

「ひなんしている人たちのためにほきんしたらどうか。」

「こわれた学校を直すのにかうのはどうでしょう。」

「この手紙を福島県の子どもたちにぜひ見せてあげたいな。」

あかりさんの手紙を読んだ職員たちは、まるでサンタさんのように目を細めながら言いました。

それから二週間後、二学期がつきが終わるころのことです。となり町の小学校をかりて、じゅぎょうをしている小学校に、サンタさんから絵本がとどきました。

そこには、サンタさんからのこんな手紙がそえられていました。



小学校のみなさんへ

学校生活を元気にすごしていますか？ わたしは、世界中せかいじゅうの子どもたちにプレゼントをおくるじゅんびで、とてもいそがしくすごしています。

実はこの前、京都の女の子から一通の手紙つうがとどきました。

「自分の分のプレゼントを、元の学校で勉強べんきょうすることができない子どもにわたしてほしい。」という手紙でした。クリスマスには少し早いけれど、その女の子のやさしい気もちをみなさんに早く知ってほしいと思い、女の子からの手紙と楽しい本をプレゼントします。

みなさんをおうえんするたくさんの方がいることをわすれずに、来年もゆめに向かむって一生けんめい勉強してください。

サンタより

〔教材作成委員会〕作成



## 「までい」の牛

二〇一一年三月十一日、午後二時四十六分。大きな地ひびきとともに、あの東日本大震災ひがしにっぽんだいしんさいが起こった。

福島県飯舘村いいたてむらでは、震度六弱のゆれが起き、屋根がわらが落ちたり、田畑に地われが起きたりするなど、たくさんひがいの被害ひがいが出た。しかし、飯舘村の被害は、建物や物がこわれるだけではおさまらなかった。

福島第一原子力発電所の爆発ばくはつにより、放射性物質をふくんだ雨や雪が、福島県内各地にふり注いだ。原子力発電所から三十〜四十キロメートルもはなれている飯舘村にも、風向きや雨のえいきょうで、たくさんの放射性物質がふり注いだ。そのため、国から全村ぜんそんひなん（全住人が村から出て行くこと）を指示しじされ、村民は村をはなれることになった。

これは、飯舘村で牛を育てていた、小林こばやしさんの体験である。

飯舘村には、「飯舘牛いいたてぎゅう」というおいしくて有名な肉牛を育てる農家がたくさんありました。しかし、四月二十二日、国から、「二か月以内に村外へひなんしてください。」という指示があり、ほとんどの農家が、牛を手放すことになりました。わずか一か月の間に、牛を育てられる土地を見つけて、ひなんを続けながら牛を育てるのは、たいへんむずかしいことだったからです。

しかし、小林さんには、三十年間大切に育ててきた牛を手放



小林さんが育てている子牛

までいの牛

「までい」は「ゆっくり」「ていねい」という意味の飯舘村でも使われている方言。ここでは、ていねいに育てられた飯舘牛をさす。

① 放射線を出す物質のこと。

して生活することなど考えられませんでした。牛を飼う仲間を頼って、飼っていた二十頭の牛を、宮城県の牧場で預かってもらうことができました。それでも、小林さんの牧場には、八十頭近い牛が残っていました。「親戚や友達がたくさんいる福島県でなんとか牛を育てられないだろうか。」と、県内の牧場を探し続けましたが、都合のよい場所は見つかりません。一時は、「牛を手放して、牧場をとじた方が楽ではないか。」という気持ちにもなりました。

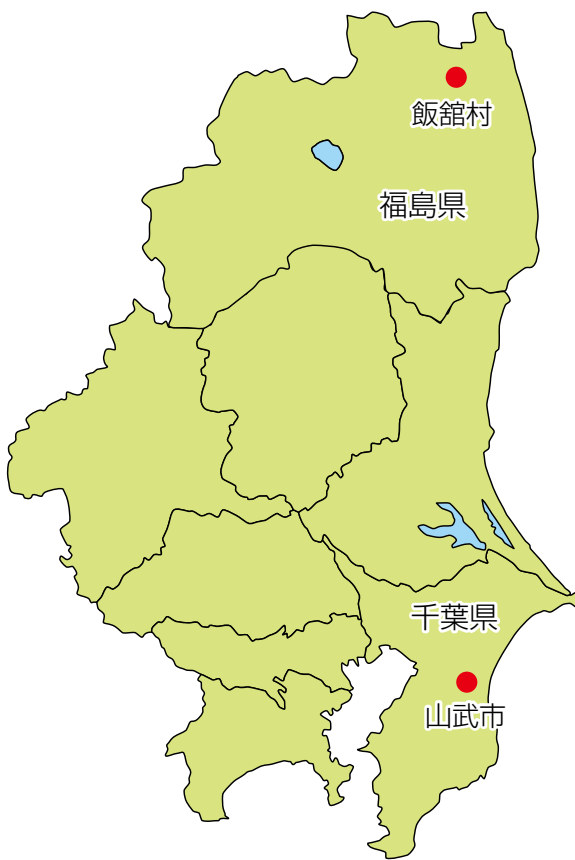
それでも、「自分が愛情をこめて育てた牛を手放さずに育て続けたい。」という強い思いが、小林さんに牧場さがしを続けさせました。

そして、やっと見つかった牧場は、千葉県山武市にありました。飯館村からは三百七十キロメートルも離れた場所で、福島県の親戚や友達とはそう簡単には会えない距離でした。

小林さんは、牛の命を守り、いっしょに生きていくためには、この牧場に牛をひなんさせ、夫婦二人で育てていくしかないかと決断しました。

それからの小林さん夫婦は、大変な日々を過ごしました。

牛の移動には、専用のトラックを使わなければなりません。専用のトラックに乗せられる牛は多くても七、八頭です。片道



福島県飯館村から千葉県山武市までは370kmある。高速道路を使っても片道6時間かかる。

六時間かけて運べる牛は限かぎられています。さらに、おなかに赤ちゃんがいる牛や、生まれて四日しかたっていない子牛もいて、積み下ろしにも注意する必要があります。

そんな小林さんの大変さを聞いて、昔からの仲間たちが応援おうえんにかけつけてくれました。同じ牛を育てている仲間たちは、トラックを貸かしてくれただけでなく、牛の積み下ろしや移動も手て伝つたってくれたのです。そのおかげで、約八十頭の牛をようやく山武市さんむしに移動させることができました。

しかし、山武市の牧場は、長い間使われていなかった牧場でした。小林さん夫婦は、ここが、飯館村と同じような環境かんきやうになるように、こわれているさくを直したり、草をかつたりして必死に働きました。

あの震災から一年半がたち、移動や慣なれない環境でストレスをためていた牛たちもようやく落ち着き、小林さんも前と同じように牛の世話ができるようになりました。

小林さんは言います。

「わたしが育てた牛は、食べてもらえばちがいが分かります。牛への愛情はだれにも負けません。わたしが育てた牛を消費者が食べ、えがおになったり、幸せを感じたりしてくれることが、



毎朝、一頭一頭の表情ひょうじやうを見て声をかけながら、牛の健康状態じやうたい かくにんを確認する小林さん

わたしの仕事の大きな役割やくわりだと考えています。」  
小林さんは、今日も早朝から牛の健康状態じょうたいを確認かくにんしながら、えさをあげていることでしょう。一頭一頭の牛に、まですいに声をかけながら。

〔教材作成委員会〕作成



## おむかえ

へいせい二十三年三月十一日、わたしの すんで いる ふくしまけんで 大きな  
じしんが おきました。わたしたちは、先生と 一っしよに こうしゃの そとに  
ひなんしました。そして、じしんが おわったあと、みんなで たいいくかんに  
入りました。いえの 人が おむかえに くるのを まつ ためです。  
じしんの せいで でんわは できなく なって いました。車が はしれなく  
なった どころも あった そうです。

わたしは、なかよしの みゆきちゃんと 一っしよに、おむかえを まっていました。

(おかあさん、早く こないかなあ。)

(もう そろそろ くるかな。)

ともだちは おむかえが きて、つぎつぎと かえって きました。

みゆきちゃんの おかあさんも おむかえに きました。

「ひなちゃん、じゃあね。」

「うん、みゆきちゃん、さようなら。」

わたしは、ひろい たいいくかんで、すくなく なった  
ともだちと、おむかえを まって いました。そとが  
だんだん くらく なって きました。

(もうすぐ よるに なっちゃう。おかあさん、なにを  
して いるんだろう。)

(このまま おむかえが こなかったら どうしよう。)

さむくて、さむくて、からだか すこし ふるえました。

「ひな。」

とつぜん 名まえが よばれ ました。ふりかえると、たいいくかんの 入り口ぐちに

おねえちゃんが 立たって いました。おねえちゃんの  
いきは、まっ白しろ でした。わたしは

「おそいよ。なに してたの。」

と いいました。そのとき、おねえちゃんが すこし  
さびしそうな かおを しました。

わたしは、おねえちゃんの 手てを ぎゅっと にぎ  
りながら、くらい みちを あるいて いえに かえり



ました。おねえちゃんの 手は とても つめたかったです。

よるに なって、かぞくの みんなが そろいました。

じしんの せいで 水が 出なく なって いたので、すいはんきに のこって いた  
ごはんを おにぎりを つくる ことになりました。

おかあさんと おねえちゃんが おにぎりを

にぎりながら、はなしを して いました。

「ひなの おむかえに 行って くれて ありがとう。」

「うん。でも、とっても おそく なっちゃったの。

でん車<sup>しゃ</sup>が とまってて、えきから 三じかん<sup>さん</sup> あるいて

いえに かえたつたの。そうしたら、ひなが いえに

いなかつたから、しんぱいで 小学校<sup>しょうがっこう</sup>まで いっしょう

けんめい はしって いったんだけど……。」

「ごめんね。たいへん だったのね。」

「うん。でも、ひなが ぶじで よかつた。」

わたしは、その はなしを きいて、どきっと しました。

その あと、ちよつと つめたい おにぎりを みんなで たべながら、おにいちゃんも、  
いえの まわりや 小学校までの みちを あるいて わたしを さがして くれた ことを



しりました。わたしは むねが きゅうつと なりました。

あれから 一年<sup>いちねん</sup> おねえちゃんは 大学生<sup>だいがくせい</sup>に  
なりました。一人<sup>ひとり</sup>で とうきょうに すんで  
います。じしんが あったり、大きな  
たいふうが きたり すると、おねえちゃん  
のことが とても しんぱいに なります。

「もしもし、おねえちゃん、だいじょうぶ。  
こんどは いつ かえって くるの。わたしが  
えきまで おむかえに いって あげるからね。」

（「教材作成委員会」作成）





## ぼくたちの学校

「史哉、元気か。」

受話器から佑大君の声が聞こえた。

「ゆう君、元気だよ。明日だね、始業式。」

「うん、楽しみだね。ひさしぶりだもんね。」

四週間ぶりの友達の声だった。

四週間前の地震は、家へ帰る途中に起きた。ぼくは、心配してさがしに来てくれた先生といっしょに、高台へ必死にげて無事だった。小さい学年の子が泣いていても、ぼくはおそろしくて、どうすることもできなかった。いつもは楽しくみんなで遊んでいた学校の前の海がふくらんでせまってきたこと、晴れていた空が急に暗くなり、雪がふってきてとても寒かったことは、今でもわすれられない。ぼくの学校は、大津波で校舎の一階と体育館の全てが押し流された。学校近くの家々も津波ではかいされた。

その後、津波で家がこわれた友達が次々と町をはなれていった。原子力発電所の事故のため、ひなんしていった友達もいた。多くの仲間がいなくなったが、別れの言葉をかかわすこともできなかった。ずっと学校にも行けず、先生にも会えず、だれとも話すことも遊ぶこともできない日々。真っ暗なまどの外をながめながら思った。

(みんなは、どうしているんだろう。)

そんなときに、始業式のれんらくが来たのだ。ぼくたちのように震災しんさいのえいきょうで学校が使えなくなつた子どもたちは、市の文化センターで合同入学式や始業式を行うことになった。

学校が始まる日、会場に行くと、友達や先生方がぼくをむかえてくれた。「大丈夫だった?」「元氣だった?」「心配してたよ。」こんな声があちらこちらで飛びかっていた。

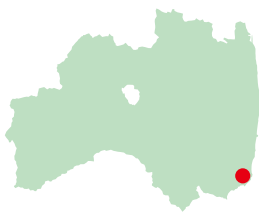
始業式が始まつた。校長先生が、だんじょうからぼくたち一人一人を見つめながら、ゆつくりと話された。

「わたしたちの学校は、津波の被害ひがいのために使えませんが、となりの小学校の教室を借りることができました。しばらくはバスで登下校することになります。校舎が違って、みなさんが集まるところが永崎①ながさき小学校です。先生たちがいます。たくさんの仲間がいます。みんなで力を合わせてがんばりましょう。」

ぼくは、校長先生の言葉を聞いて、自分にでき



① いわき市立永崎小学校



ることは何だろうと考えた。

今までとちがう校舎、バスでの登下校、ろうかにある図書館、パネルで仕切られた教室。今までとはちがうことばかりで、とまどうことが多かった。だから、登下校のバスの中は、ぼくにとって、一日のきん張感から解放され、ほっとできる場所だった。ぼくは六年生として、バスが海岸の横を通るときは、小さい学年の子どもたちに、明るい声で「だいじょうぶだよ。」と声をかけた。海岸ぞいを通るとき、バスの中は、息さえも止めているかのように静かだったからだ。だれもが大好きだった海を見ようとはしないのだ。

そんなことが続いたある日、帰りのバスの中で、一年生の子が泣き出したことがあった。わけを聞いても泣くばかり……。周りの二年生や三年生はこまってしまっていた。ぼくは、「元気を出そうよ。」「もうすぐ家に着くよ。」と声をかけたが、一年生は泣くばかりだ。みんなの視線がぼくに集まる。ぼくも泣きたくなかった。するとそのとき、ゆう君がとつぜん校歌を歌い出した。

「波さわやかにきらめいてー 燃える希望の日がのぼるー おどるむねの調べのせてー とどろく海こえ歌よ飛べ。」

歌声は少しずつ重なり、やがて静かだったバスの中が大きな歌声で包まれた。隣にすわっていたゆう君が、

「史哉。ぼくたちのいるところが学校なら、このバスの中も学校だね。」

と言った。ぼくも、えがおでうなずきながら、大きな声で歌った。少しずつ、力がわいてきた。ど

るだらけの校舎をそうじしてくれた先生方や地域ちいきの人たち、たくさんのおうえんの声を届けてくれた全国の人たち、ぼくたちの学校の再開のために力をつくしてくれているたくさんの人たちにとどくようにと。気がつけば、いつのまにか泣きやんだ一年生も照れくさそうに歌っていた。

「ぼくたちの卒業式までに学校が直るといいな。」

「そうだね。そのときも、大きな声で校歌を歌おうね。」

季節は、夏になっていた。今日きょうも下校のバスの中で、みんなが校歌を歌っている。永崎の海はいつものようにおだやかにかがやいていた。

（「教材作成委員会」作成）





## がんばらやんばい

地しんが起きてから、ぼくの町では水道が使えなくなった。そのため給水所になった中央公園に、毎日自動車で、水をもらいに行く生活が始まった。給水車から自動車まで水を運ぶのがぼくの仕事。このときはじめて、水が重いということを知った。

そんな中、福島第一原子力発電所で事が起こった。

「もしかしたら、ひなんするようになるかもしれないな。」

お父さんが言った。

「ガソリンをのこしておかなければいけない。あしたの水くみは歩いていこう。」  
よく日から、自動車で行っていた公園まで、歩いて行くことになった。

「お父さん、水くみ、いつまで行かないといけないの。重いから車で行こうよ。」

ぼくの言葉に、お父さんは悲しそうな顔をした。

次の日の朝、町内会長さんがぼくの家に来て来た。

「近くの集会所に給水車が来てくれることになりました。十時から給水できますよ。」

集会所までなら歩いて五分もかからない。

「水くみに行くぞ。」

お父さんは、せなかのリュックサックに入るだけのペットボトルを入れて、両手にはウォータージャグを二つ持って家を出る。お兄ちゃんはやかんを両手に持って後からいっしょについて行く。ぼくも、あわてて小さいペットボトルを持って、お兄ちゃんの少し後ろをついて行った。

集会所に来ていた給水車は、きのう中央公園に来ていた給水車とはちがっていて、じゃ口がついていなかった。太いかんからドボドボといきおいよく水が出てくる。ペットボトルを持ってきた人が多かったが、のみ口が小さくて水がなかなかうまく入らない。あせって水を入れようとしているおじいさんの後ろで、いらだっている人たちの顔が見えた。

「ペットボトルの人、ここにやらんでください。」お父さんがとつぜん言った。そして、せっかしくんだウォータージャグの水を、みんなのペットボトルに入れ始めたのだ。ジャグで入れるとペットボトルはすぐにまんタンになった。すると、お兄ちゃんがやかんで、給水車の水をお父さんのところまで運び始めた。いつのまにかウォータージャグにならぶ人の数もふえて、列は五列れつになっていた。

「ああ、そうしてもらえると助たすかるばい。ざざつつとなかばつてん、がんばらやんばい。」  
とつぜん後ろから声をかけられ、ぼくはびっく



① たいへんだけれど、がんばってください。

りした。

それは、水道局の人だった。(今、なんて言ったんだらう。) と思っていると、

「ああ、そうか。福島の人には分からない言葉だね。えっと……、『たいへんだけれど、がんばってね。』という意味になるかな。きみのお父さんのおかげで助かったよ。」

そう言う水道局の人のせい服には「久留米市水道局」と書いてあった。その話が聞こえたのだから、お父さんが手を止めて近づいてきた。

「久留米って、福岡県の久留米市ですか。」

お父さんは、水道局の人に聞いた。

「久留米市から、十一日の夜に、給水車で出発したばい。」

よく見ると、給水車にも久留米市水道局と書いてあった。お父さんはおどろいていた。

「ありがとうございます。たいへんでしたね。」

「いやいや、ざつとなかは、みなさんばい。がんばらやんばい。」

「本当に、ありがとうございます。とっても助かりました。」

水くみが終わっても、お父さんはまた同じように水道局の人にお礼を言っ



② たいへんなのは、みなさんですよ。

ていた。町内会長さんも、お兄ちゃんも、近所の人も、みんなていねいにお礼を言っていた。

「あしたも来ますから。」

久留米市水道局と書かれた給水車は、集会所から帰っていった。

家に帰ってから、ぼくは、久留米市の場所を調べた。お兄ちゃんが、千四百キロメートルぐらいはなれていること、車で十五時間ぐらいかかることを教えてくれた。

「お父さん、あしたも水くみに行こう。」

「そうか、助かるよ。ありがとうな。」

お父さんはうれしそうに言った。そう、ぼくには、久留米市の水道局の人たちにつたえていないことがある。あしたはしっかりとつたえよう。

ぼくは、ペットボトルをリュックにつめこんだ。

（「教材作成委員会」作成）

## 舞台ぶたいの上うへで

ぼくは何をやっても気持ちに乗らない。新学期が始まり、教室にけいじする顔写真をとっているときもそうだった。

「はい、わらって。」

と先生に言われても、

(急に言われても、すぐにはわらえないよ。)  
と思ってしまう。

東日本大しんさいひがしにほんだいが起きてから、ぼくの住む地区すむちくもほうしや線りせんりようが高く、ひなんしななければならなくなった。お母さんかあが県内けんないでひなんひなんでできる地いきをさがし、ここ南会津町みなあいづまちにひなんすることになった。南会津は生まれてはじめての土地。ぼくの生まれ育った浜通りではほとんどふることのない雪がたくさんふる町だ。いつも相談そうだんにのってくれる父は仕事しごとのため地元じもとにのこり、なかのよかつた友達だちともはなればなれで、楽しいことは何一つない。ぼくは、一人ぼっちになってしまった感じかんがした。

ひなんした南会津町には、日本三大祇園祭ぎおんまつりの一つがあり、今も「子ども歌舞伎かぶき」<sup>①</sup>がのこされている。ほぞん会や役場やくばの方々に教えてもらって、今年ことしはぼくたちの学年が「子ども歌舞伎」にちようせんする。二月には県の文化センターでのこうえんも決まった。えんもくは「絵本 太功記たいこうき」<sup>②</sup>。



① 小学生が主体となつて歌舞伎をえんじる。祇園祭においては屋台でえんじられる。  
地元の小学校では学習発表会等なをでえんじ、発表する機会きかいをもうけている。



あけちみつひで しゅじんこう  
明智光秀を主人公にした歌舞伎だ。主人公の光秀が、うら切り者として悲しいさいごをむかえる話だ。ぼくは、そんなえんもくをやりたいとは少しも思わなかった。

歌舞伎の練習も進み、いよいよ役者を決めることになった。すると

「十次郎役は、健君にやってもらいたいです。せつかく南会津に来たのだから、でんとうてきな歌舞伎を知ってほしいです。」

と、近所の正樹君がぼくをすいせんしたのだ。光秀のむすこで、味方のぐんが負けたことをつたえる重要な役である。もともとやりたくないのに、役までつくなんて。ぼくは顔を上げられなかった。でも、結局クラスのみんなにおされ、気が進まないまま十次郎役を引き受けてしまった。

③ 「……親人、此の所に御座あつてはあやうしあやうし、片時も早く本国へ、帰らせ給え、早う早う」  
深く、深いきずを負いながらも、父親を気づかうという大切なせりふ。練習のたびに、

「首のふり方が大きくて上手だね。」

「長いせりふを、よくおぼえてきたね。」

と、友達はぼくをばげましてくる。でも、どんな言葉をもらっても、ぼくの気持ちは乗らなかつた。

発表会が近づいたある日、東京から歌舞伎の先生が来て、ぼくた



② 歌舞伎の演目。  
明智光秀の「三日天下」を題材にして書かれた。

③ 十次郎のせりふ。  
『父上、ここにいらつしやつたのではとてもきけんです。一時も早く国へお帰りください。早く、早く』

ちの舞台のけいこをつけてくれた。そのとき

「君、なかなかいい声してるな。よく通った声は役者にはもってこいだよ。」

と、思いがけずほめられた。正樹君まで、

「だから健君をすいせんしたんだ。」

なんてじょうだんめかして話す。ぼくは急にてれくさくなつて言葉が見つからなかった。

えんぎだけではなく、舞台のセットや小道具も自分たちで作る。

「よろいの色はこれでいいのかな。」

「後ろのかべはここでいいかな。」

など、みんな自分の役わりに一生けん命取り組んでいる。

④義太夫の声は、日に日に大きくなっていくのが分かる。友達も、それを教える先生も、みんな本気だった。歌舞伎の発表会をせいこうさせたかったからだ。舞台に立つのは、数人の役者だけれども、それをささえるためにみんなが本気でがんばっている。気がつくと思はれてはいられないと思うぼくがいた。

舞台のそでで、出番を待っていたぼくに、歌舞伎の先生がそつと教えてくれた。

「正樹君も、県外からの転校生だったんだよ。お父さんの仕事の都合でね。かれも子ども歌舞伎を



④ 三味線とともに、情景や心情などを表したり、話を進めたりする役。

通して、この町の子になったんだ。君も舞台を経験したら、何かがわかるよ。」

本番と同じ歌舞伎のけしようをしたとき、白ぬりの正樹君の顔はおこっている顔なのに、とてもおかしくて、ぼくは思わずわらってしまった。正樹君もぼくの顔を見てわらいながら、

「悲しい顔なんだから、わらったらだめだよ。十次郎。」

と言うと、白ぬりをしたみんなが大わらいした。えがおのみんなの中で、ぼくもつられて大わらいした。

発表の日。ぼくが最後の<sup>さいご</sup>の<sup>⑤</sup>みえで<sup>⑤</sup>見得を切ると、お客さんは大きなはくしゅをおくってくれた。ふり返ると、みんなわらっていた。ぼくはもう一人じゃないんだと思った。

〔教材作成委員会〕作成



⑤ 重要な場面や人物の気持ちがもり上がったときなどにえんぎを止めてとるポーズのこと。  
ポーズをとること  
を「見得を切る」という。

## 私の誕生日

三月十一日は、春香の誕生日。春香の家では、家族の誕生日に欠かせないものが二つある。それは、母がかく似顔絵と手作りのケーキ。そして、春香にとって大切な存在なのが、さよ子おばさんだ。おばさんは母の妹で、助産師①をしている。毎年春香の誕生日には、お祝いに来てくれる。

今年の誕生日の朝も、春香が二階の部屋からおりてくると、母が、「はるちゃん、誕生日おめでとう。」

と言いながら、十一まい目の似顔絵を取り出して、リビングのたなの真ん中にかざった。

「わあ、お姉ちゃんの顔、去年より大人っぽい。」

妹の夏紀がパチパチとはくしゅをした。春香はとてもうれしかった。

その日の午後二時四十六分、あの東日本大震災が発生した。とつぜんの大きなゆれに春香たちの教室には、悲鳴と泣き声がひびいた。あわてて校庭にひなんした春香たちは、小雪のまうち、母がむかえに来るまで、寒さにふるえながら待っていた。

その夜、春香たちは、水も電気も止まった家の中で、地震が起こる前に母が作っていたケーキを夕飯の代わりに食べた。ケーキにともしたろうそくの明かりが、こんなに明るく見えたのは初めてだった。

「お母さん、さよ子おばちゃんはだいじょうぶかな。」

① 出産を助け、母子に対する保健指導や世話をする人

「電話もけいたいもつながらないの。」

母の言葉に、春香は、おばが心配になった。

翌日、病院のおばから父の会社に電話があった。十一日の朝、出産に立ち会った後に大地震が起こって、れんらくを取るひまもなかったのだという。春香は、おばの無事が分かり、ほっとむねをなで下ろした。

四月から春香は六年生になった。大震災へのおそれは少しずつうすれ、以前の生活にもどりがつあった。

震災の翌年の三月十一日、春香の十二回目の誕生日がやって来た。テレビでは、震災のことや震災でなくなった人のニュースがくり返し流れていた。

リビングには、春香の新しい似顔絵がかざられ、父、母、妹、春香、そして、おばさんがケーキを囲んでいた。

「はるちゃん、おめでとう。」

しかし、春香は、みんなのえがおを見ているうちに、何とも言えない気持ちになった。二万人近くの人々の命と未来をうばった大震災。三月十一日に「おめでとう。」だなんて言っただけなのだろうか。





春香は、思わずうつむいてしまった。

だまっただままの春香に、おばは、

「ねえ、はるちゃん、これを見て。」

と、バッグから一まいの写真を取り出し、春香の目の前に置いた。写っていたのは、生まれたばかりの赤ちゃんとわかいお母さん、そのとりには白衣すがたのおばが笑っていた。

「はるちゃん、この子は震災の日の朝に生まれた赤ちゃんなのよ。地震のとき、病院はパニックになったわ。器械はたおれ、水も止まっちゃったの。余震も続いていて、もうだめかと思っただぐらい。でも、私もお母さんもあきらめなかった。一階のロビーに、毛布もうふやふとんを運び出し、長いすをベッド代わりにして、赤ちゃんやお母

さんを休ませたの。あの日の夜は、こごえるように寒かったでしょ。お母さんたちは、赤ちゃんの体温が下がらないように、ずっと湯たんぽで温めていたのよ。」

たくさんの命が失われたあの日に生まれ、みんなに守られて生きぬいた赤ちゃんがいる。

「はるちゃん、あなただってそうよ。あなたは生まれてすぐに、腸に病気が見つかって手術しゅじゅつしたことは聞いているわね。みんながとても心配したのよ。小さな体にたくさんの管くだが通とうされて、お父とうさ



んもお母さんもそれを見て泣いていた。お母さんは、あなたをだっこできないから、毎日病室であなたの似顔絵をかいていたの。お母さんが毎年かく似顔絵は、『元気に育ちますように。』っていう願いがこめられているのよ。あなたの誕生日が三月十一日の震災の日と同じだから、なおさら、みんなに支えられて、今生きていることをわすれてはいけないと思うの。』

春香は、おばの話にむねがいっぱいになった。顔を上げると、父と母は春香の方を見て、ほほえんでいた。

ろうそくの明かりに照らされた自分の似顔絵を春香はじっと見つめた。

「誕生日おめでとう、はるちゃん。」

「ありがとう。」

春香は力強く、うなずいた。



〔教材作成委員会〕作成

## ぼくのカブトン

ある日、おにいちゃんと いっしょに 『常葉町カブトムシ自然観察園』ときわまち しぜんかんさつえんに いくことになった。ぼくは こわくて、もじもじ しているのに、おにいちゃんは、

「カブトムシって かつこ いいんだぞ。」  
と かって カブトムシに むちゅうに なっていた。

ぼくが 立たって いるところに 園えんの おじさんが やってきて、にぎった りょう手てを さし出だした。右手みぎてを ひらくと、かわった すがたの カブトムシの シール。

「これはね、この 観察園の キャラクター。名なまえは、『カブトン』。王おうさま みたいだろう。」  
と、いった。

そして、こんどは、左ひだり手を ひらいた。

「うわあああ、カブトムシ。」

ぼくは、おもわず おじさんから はなれて しまった。



徳島県常葉町「カブトムシ自然観察園」入り口

おじさんは、わらいながら いった。

「よく 見て ござらん。カブトムシの からだは、だれも みがいて いないのに ぴっかぴか。

この 大きな つのは、てきとの たたかいに つかうんだ。」

そう いった、 虫めがねと いっしょに ぼくの 目の まえに カブトムシを さし出した。

ゆっくり 虫めがねを のぞいてみた。

(ひかっている せなか。 つよそうな つの。ほんとうに 王さま みたいに どうどうと してる。)

おじさんは、カブトムシの ことを いろいろ おしえて くれた。

つので じぶんの たいじゅうより おもい てきを なげ とばせること、木の しるが 大すきで 虫などは たべないこと、

一年しか 生きられず、なつの おわりには しんで しまうこと、

カブトムシの いる もりの 土には えいようが いっぱい あることなど、はじめ て しること ばかり だった。



観察園のキャラクター カブトン

そして、おじさんは、

「この町には、カブトムシの そだつ ばしよが  
たくさん あって、たくさんの 人が おせわを  
して いるんだよ。 げんしりよく はつでんしよ  
の じこの ときは、ほうしゃのうで よごれて  
いない おちばを あつめたり、土を とりかえた  
りして ころう したんだ。 カブトムシに げん  
きに そだって ほしかった からね。」  
と、おしえて くれた。

(常葉町には、カブトムシのおせわを がんばって  
いる 人が、いるんだ……。)

なんだか ぼくは、カブトムシに さわって  
みたく なって こんどは、じぶんから 手を  
出した。おじさんは、カブトムシを そっと のせて くれた。

人さしゆびで ぴかぴかの せなかを ゆつくり なでた。 目が ひかっていた。  
つのに さわると さきが とがった。 てきを もちあげるのに ちようど いい。



びようきの よう虫  
がいないか しらべ  
ます。





(そういえば、おにいちゃんも かつこいいと いったな。 ぼくの しらない ひみつが まだまだ ありそうだ。)

今、<sup>いま</sup>ぼくは、うちで カブトムシを かって いる。『カブトン』<sup>な</sup>ていう 名まえをつけて、そだてて いるんだ。

「はねの 出しかたと しまいかたも わかったぞ。 カブトンの ひみつ、もっと さがすぞ。」

(「教材作成委員会」作成)

## たいこの音

「もうすぐ、おはやしの練習が始まるんだよ。」

と、なかよしのさちこちゃんはうれしそう。「おはやし」とは、<sup>①</sup>白河ちようちん祭りのときに、<sup>②</sup>屋台や山車の上でたいこの演そうをすること。

「ねえ、よしこちゃん。今年は、いっしょにおはやしをやってみようよ。」

さちこちゃんにさそわれたので、わたしは、しかたなく参加することにした。

おしえてくれるのは、本町でお祭りのおはやし係をしている大竹さんだ。

「地しんがあつた年はお祭りができなくて、とてもざんねんだったけど、みんなでがんばって、次の年から、何とか、続けられるようになったんだ。」

大竹さんが、うれしそうに話してくれた。

「まずは、みんなでたいてみるか。」

はじめての体けんだ。どきどきしながらたいこをたたいてみた。バチがたいこの皮の上をはねて、「ポン」と気持ちのよい音をひびかせた。こんな感じで音が出るんだ。

大竹さんは、

「音を出すのはかんたんだけど、みんなで合わせるのはむずかしいぞ。最後までがんばれよ。」と声をかけてくれた。こうして、おはやしの練習が始まった。

① 白河市にある鹿嶋神社のお祭りのこと。二年に一度おこなわれ、三百年続いている。おみこしやちようちん行列、屋台や山車の引きまわしなどがおこなわれる。

② お祭りのとき、子どもたちが引いて動かす、車輪のついた出し物のこと。花や人形、ちようこくなどがかざられている。町によって、屋台か山車のどちらかでよぶ。

曲をおぼえるまでは、たいこをたたかせてもらえない。早くたいこをたたきたくて、わたしは、バチでぎぶとんをたたいて、むちゅうで練習をした。

数週間がすぎ、曲をおぼえたわたしは、たいこをたたけるようになった。心がうきうきした。ふしを歌いながらたたくと、なんとなくじょうずになったような気がした。

「今日から、みんなで合わせるぞ。」

楽しみにしていた合同練習が始まった。わたしは、みんなのはくりよくのある音や速さにびっくりさせられた。リズムを合わせるのがむずかしくてついていけない。何回やってもうまくいかず、すぐおくれしてしまう。自分だけがおくれるからはずかしい。まちがったことがみんなにわからないようにと思うと、音はだんだん小さくなっていった。

わたしがうまく合わせられないせいで、演そうはとちゅうで何度もとめられた。練習のときの大竹さんは、とてもきびしい。

「リズムがばらばらだ。まわりの音をしっかりと聞きなさい。」

つらい練習が続いた。手のまめがいたくてバチをおとすことが多くなった。うでがしびれてバチをふるのもつらい。

ひたいに汗をにじませながら生き生きと練習する友だちの姿がまぶしい。わたしだけがとりのこされているようで、さびしい気持ちになる。さちこちゃんが、「じょうずになってきたよ。」とはげましてくるけれど、よけいつらい気持ちになる。練習が終わって帰るときは、くやしくて、くち

びるをぐっとかんでがまんしても、目からなみだが落ちてきた。

「おはやしなんか、やらなければよかった。」

やめようかな、と思っていたとき、後ろから大竹さんの声でした。

「練習は大変かい。たいこの音は、たたく人の気持ちがあられるんだ。おれもいい音だっけほめられるまで、時間がかったなあ。」

わたしは、はっとした。みんなとリズムを合わせようとばかりして、音なんて気にしていなかった。今のわたしのたいこは、どんな音がしているんだろう。わたしは、自分のバチを見つめた。

わたしは家でも練習を始めた。ふしを口ずさみながら練習をしていると、お父さんがそばに来て言った。

「昔、おはやしむかしが聞こえてくると、みんなよろこんで家から外に出てきたもんだよ。たいこの音を聞くと自分の町がほこらしくなるからね。屋台や山車が町内ごとにちがうように、おはやしのリズムも音も町内ごとにちがうんだよ。お前が町のたいこをたたくなんて楽しみだなあ。」



お父さんにそう言われて、うれしくなった。

わたしは、町を代表してたたくんだ。そう思うと、今まで以上に練習をしなければと思った。

毎日休まずに練習を続けると、自分でもじょうずになっていくのがわかる。できなかったことが、いつの間にかできるようになっていく。みんなの音にわたしの音が重なる。せいっぱいバチをふりおろして音を出す。かけ声を合わせてたたいたときのたいこの音は、はくりよくがある。みんなの気持ちの一つになるのが、たいこの音でわかる。「たいこの音が、変わってきたよ。自信がついたんじゃないか。あきらめずに、よくがんばったね。」と、にこにこしながら大竹さんがほめてくれた。

今日も練習が始まる。わたしはたいこの前に正座をすると、大きく息をすって、しっかりと前を向いた。わたしのたいこは、どんな音を奏でるだろう。



〔教材作成委員会〕作成



## あいづの三なき<sup>さん</sup>

えみは 二年生<sup>にねんせい</sup>の とき、しんさいの ため、おかあさんと いっしょに、南相馬<sup>みなみそうま</sup>から 会津<sup>あいづ</sup>の しんせきの いえに ひなん しました。そのいえの となりには、ひとりぐらしの よしこばあちゃんが すんで いました。一年たって 南相馬に もどった ある日<sup>ひ</sup>、よしこばあちゃん から たくはいびんが とどきました。

「えみ、よしこばあちゃんから にもつが とどいて いるよ。」

はこの 中<sup>なか</sup>には しみもち<sup>①</sup>とおき上がりこぼうし<sup>②</sup>が 四つ<sup>よつ</sup> そして、メモが 入<sup>はい</sup>って いました。

えみちゃん、なぜひいて ないかい。よしこばあちゃんだよ。ばあちゃんは はるに なって、まいにち はたけ しごと<sup>しごと</sup>に 出<sup>で</sup>ているよ。また、まっくろに なって、えみちゃんにか



① もちを水にひたしてこおらせてほしたほぞん食<sup>しよく</sup>。

② あいづのえんにちなどで売られるみんげいひん。たおしてもおき上がる<sup>あがる</sup>ことかからえんぎがよいといわれる。家ぞく<sup>かぞく</sup>の人数<sup>かず</sup>より一つ多く買<sup>か</sup>うとよいと言<sup>い</sup>われている。

りんとみたいて いわれる かな。

わたしは、あかるくて はたらきものの よしこばあちゃん らしいな、とおもって わらって しまいました。

ばあちゃんは、

「えみちゃん、ばあちゃんと さんぽに いこうか。」

といて、いろいろな ところに つれて 行って くれました。うすもいろいろの 山やまざくら、どこまでも つづく なの花はなばたけ、ばあちゃんと いっしょに きれいな はなを 見みていると、たのしい きもちに なりました。いっしょに だろだらけに なって、じゃがいも ほりもしました。ばあちゃんの つくった じゃがいもは とっても おいしかったです。

そういえば こんなことも ありました。

大きな おおかえるを みて、ないてしまったとき、

「こわく なくなる おまじないを おしえて あげようかね。まねして ごらん。」

③「さすけね。 ねっか さすけね。」

ばあちゃんが にっこりと わらいました。まねして みると いつのまにか なみだが とまっています。

よしこばあちゃんは

③ あいづちほう 会津地方の方言  
「だいじょうぶ。 まったく だいじょうぶ。」

「まごが できた みたいで うれしいなあ。」  
と、行って、学校がっこうに 行くときは、まいあき、手てをふって  
見おくって くれました。ほんとうの ばあちゃん  
みたいでした。

会津って いいところだなあと おもうように なっ  
たころ、南相馬に もどることに なりました。おわか  
れの日 よしこばあちゃんには、あえませんでした。「お  
わかれの 日は、ないちゃうから 見おくりには 行か  
ないよ。」と ばあちゃんは いていた そうです。

おかあさんが しんせきの おばさんに きいた は  
なしだと、わたしが 南相馬に もどって から、よし  
こばあちゃんは いつも わたしの はなしを してい  
る そうです。よしこばあちゃんのことをおもいだ  
すと 目めから なみだが こぼれました。わたしは  
いっしょうけんめい へんじの えと てがみを かき  
ました。



おばあちゃん。おてがみ ありがとうメッセージ



ました。わたしは げんきです。わたしは 三年生になりました。わたしの なき虫も よしこばあちゃんの おまじないの おかげで 少  
しずつ なおってきました。えみが よしこばあちゃんと いっしょに なの花ばたけに  
行ったときの えを かきました。おばあちゃん  
の いえの ちゃのまに かざってください。  
なつ休みには あいに いきます。

わたしが かいたえと てがみを おかあさんに 見せると、おかあさんが こんなことを  
いきました。

「会津に すむと、ゆきが おおくて つらくて なき、人に やさしくされて うれしくて な  
き、はなれる ときに わかれば かなしくて なく。これを あいづの 三なきと 言うのよ。  
えみには むずかしい かな。」  
わたしは よしこばあちゃんの ことを おもい出して  
いいました。

「ううん。わたし なんとなく わかるわ。」

〔教材作成委員会〕作成



## 子どもの日

毎年五月五日こどもの日に、地域の人たちが子どもたちのすこやかな成長を祈るお祭りが「天神様のお下がり」だ。南相馬市で百年以上も続いている。

子どもたちが大きなはたを持ち、おみこしをかついで、丘の上にある天神様におまいりにいく。むかしはおまいりをした後、海まで下がっていたので「お浜下り」とも言われていたそう。ほくも小さいころから近所の友だちといっしょに天神様までおまいりに行っていた。

平成二十三年三月十一日、ほくの住んでいる地いきは、大きな地しんとともに、とても大きな津波におそわれた。波は、たくさんの家をのみこんだ。次の日には、原子力発電所の事故が起きた。ほくも町の人たちも、みんな遠くへひなんしていった。

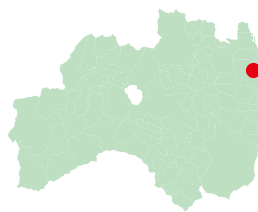
あれから三年がたち、町の人々が少しづつもどりはじめたころ、ひなんをしてはなればなれの人たちを集めて「天神様のお下がり」をふっかつさせようという話もちあがった。

その話がでてから、南相馬市の仮設住宅に住んでいるおじいちゃん、時間を見つけては、天



写真：『原町市史』第9巻特別編Ⅱ民俗より転載

① 原町区下江井地区





神様までの道の草かりをするようになった。

「これなら、だいじょうぶだ。祭りができるぞ。」

と言うおじいちゃんに、

「こんな時におまつりなんてしていいの。」

とぼくは答えた。

「毎年楽しみにしてだべ。なんだ、よろこぶがと思ったのに……。」

おじいちゃんがさびしそうに言った。仮設住宅に住んでいるおじいちゃんにひさしぶりにあったのに、うれしい気持ちにはしぼんでいった。

ぼくは、ひなん先のいわき市から、久しぶりに南相馬市にもどって自分の家のかたづけを手伝っていた。おじいちゃんも来ていた。

「おいっ、これ見てみる。なつかしい写真が出てきたぞ。」  
とつぜんおじいちゃんが言った。

「えっ、これおじいちゃん。」

すぐに家族が集まってきた。

「あつ、となりの啓三さんも写ってる。」

体の何倍もある大ききなはたを重そうにかかえて先頭を歩くおじいちゃんの姿が写っていた。その



後ろには、少し小さなはたをもつ啓三さんが続いている。

「昔は、道が悪くてな。重いおみこしやはたをもつて山道を歩くのは大変だったんだ。だけど、天神様は子どもがくもんの学問の神様だからな。子どもだけで力を合わせておまかみさまいりするのがならわしだったんだ。そうそう、みこしの中に、代々子ども会の頭をつとめた子どものおふだを入れるんだ、じいちゃんのも入ってんだぞ。」

おじいちゃんは、なつかしそうに目を細めた。  
そう言うと、おじいちゃんはまた草かりにでかけた。

三年ぶりのお祭りふつかつの日がやってきた。ひなひな先から十二人の友だちが集まった。ほくもその中の一人だ。地域の人たちも入れて、約四十人の大行列となった。

② 白しろしようぞくきを着て、えぼし③をかぶって、みこしをかついだ。今年は、ほくが一番年上なので子ども会の頭だ。

はじめて参加した健太が声をかけてきた。

「ああ、重い。このおみこし重すぎるよ。」

「大切なみこしなんだからがんばれよ。天神様はおれたちの神様なんだからな。」  
そう言って、ほくは、みこしを持つ手に力をこめた。前の祭りより軽く感じた。

ほくたち二人は丘の上を見上げた。頂上まで、もう少しだ。今まで頭になった人は、これを伝え



② 白い衣服のこと。

③ 日本の伝統的な男性用かぶりもの一種。

続けてきたんだ。

一番大きなはたを先頭に、みこし、たいこ、さいせんばこと、おじいちゃんが草かりをしてくれた道を上って行く。三年ぶりのたいこの音がひびきわたる。

「ドンドンカッカ、ドンドンカッカ」

丘の上から見る海はきらきら光っていた。

（「教材作成委員会」作成）

## ひまわり

「健ちゃん、図書室に本がたくさん入ったんだって。昼休みに見に行こうよ。」

本が大好きなぼくは、仲良しの健太くんを誘った。東日本大震災以降、さまざまな救援物資に交じって、全国からたくさんのお本が、学校に送られてきていた。

「うん……。本もうれしいけれど、ぼくはちがうなものもよかったな。」

健太くんの答えに、ぼくは言葉をつまらせた。

「本じゃないもの……。健ちゃんは、どんなものもいいの。」  
聞き返すと、健太くんが言った。

「となりの学校には、サッカー選手が来て、サッカー教室を開いたらしいよ。いとこの学校には、歌手が来て、歌のプレゼントをしてくれたんだって。」

「えっ、本当。いいなあ。」

ぼくたちは、震災後、被災地を訪れる有名人のことで話が盛り上がり、いつしか図書室に行くことを忘れてしまっていた。

五月のある日、全校集会の時のことだ。校長



先生がおっしゃった。

「福井県鯖江市にある立待小学校のお友だちが、みなさんを元気づけるために、ひまわりの種を送ってくれました。イラストをかけた手作りの袋に種を入れて、たくさん届けてくれました。自分の背丈よりも大きなひまわりから種を収穫する時には、指先が紫色に変わるまで頑張ったそうです。みんなを応援するためにつくった歌も贈られてきました。さっそく、みんなで聞きたいと思います。」

## ひまわり

福井県鯖江市立立待小学校  
3年生のみんな

少しでも だれかの 力に なりたい  
ひまわりの花を さかせたい  
小さな種が つながって いて  
たくさんの 小さな 芽を 出したよ

風がふいても 曲がっても  
雨が降っても 立っている  
太陽に 向かって のびてゆく  
黄色い 大きな ひまわりの花

秋になったら 種が とれたよ  
みんなの 気持ちが とどいたよ  
心の中にも さいた ひまわり  
いつまでも ずっと さき続けるよ

風がふいても 曲がっても  
雨が降っても 立っている  
太陽に 向かって のびてゆく  
黄色い 大きな ひまわりの花

みんなが 助け合えば 心もつながる  
そんな 日本が 大好きだ  
100人の 人が集まれば  
100こ以上の 愛が 集まるよ

風がふいても 曲がっても  
雨が降っても 立っている  
太陽に 向かって のびてゆく  
黄色い 大きな ひまわりの花

心の中の ひまわりの花

やさしいメロディーとともに元気のよい歌声が、体育館中にひびきわたった。ぼくは、胸の中に、何かあたたかいものがこみ上げてくるのを感じた。

『風がふいても曲がっても 雨が降っても立っている 太陽に向かったのびていく 黄色い大きなひまわりの花』





すてきな歌詞が、ぼくの耳にいつまでも残った。

『風がふいても曲がっても 雨が降っても立っている 太陽に向かったのびていく黄色い大きな ひまわりの花……。』

家に帰ってからも、ぼくの頭の中には、あのメロディーが流れていた。口ずさんでいると、お母さんが笑顔で話しかけてきた。

「あら純也。すてきな歌ね。」

ぼくは、ひまわりの種と歌のことを話した。

「まあ、福井から。ずいぶん遠くから送られてきたのね。純也たちのことを応援してくれる人が、日本中にいるってうれしいことね。それに歌詞がすてきよね。だって、ひまわりがまるで純也みたいだもの。」

「えっ、ぼくがひまわり……。」

ぼくは、思わず聞き返した。

「地震の後、たくさんつらいことがあったでしょ。それでも前を向いて頑張っている純也を見ていると、お母さんたちも元気になれたの。すてきな歌をつくってくれた福井の友だちに、お母さんから『ありがとう』が言いたいわね。」



ぼくははっとした。

「ぼくが、ひまわり……。」

次の日から、交代でひまわりに水やりをすることにした。ぼくは、ひまわりみたいだと言われたことがうれしくて、この歌を歌いながら、毎日水をやり続けた。

夏、ひまわりは、今まで見たことがないくらい大きな花を咲かせた。

「先生、見て。すごいよ。このひまわりは、ぼくより背が高いよ。」

花壇かだんに集まった一年生が、ひまわりを見て大はしゃぎしていた。

太陽に向かってまっすぐ伸びる大輪のひまわりは、ぼくたちを見てほほえんでいるようだった。

〔教材作成委員会〕作成



## アイナふくしま

「さやか、どうした。動きが合っていないぞ。」

「なんだかやる気が感じられないな。」

地区で、八十年ぶりに三匹獅子舞を復活させるため、小学生の踊り手を募集しているという話をさやかが聞いたのは、今年の今頃だった。「地域を活気づけ、震災を乗り越えたい」という願いが込められているということも耳にした。さやかは、募集ポスターの迫力ある獅子舞の写真にひかれ、すぐに参加を決めた。

習いはじめはよかった。基本の動きもすぐ覚え、先生からよくほめられたし、獅子頭を初めて手にしたときは、ワクワクした。でも、週二回、夜七時から一時間半の練習は、思っていたよりたいへんだった。しばらくすると、「参加しなければよかった。」などと思いつながら家に帰ることが多くなった。

浮かない顔で家に帰ると、新聞を広げていた父が、

「去年、さやかたちの学校に来て、フラダンスを教えてくださいました工藤さんの話が載っているよ。」  
と言って新聞を見せてくれた。

### 「アイナへの思い込め」

震災と原発事故で経験したことや被害にあったふるさとへの思いを、ダンサーみんなが言葉に出し合って生まれたフラダンスが、「アイナふくしま」だ。工藤さんは、震災から三年たった今も、「ア

「アイナ」はハワイの言葉で「ふるさと」という意味。

上記の新聞記事は、2014年5月に朝日新聞に連載された「フラガールの半世紀」と、スパリゾートハワイアンズ・ダンシングチームの工藤むつみさんへの取材をもとに作成されている。

「イナふくしま」をステージで踊るたびに、「震災と原発事故の記憶を忘れまい」と誓う。



三年前の震災直後のことだった。「地元で元氣をと思つて、これまでステージに立つてきた。」「私は避難所を回つて踊りたい。」湧き出る思いを胸に、いわき市内の避難所訪問をスタートに、全国各地と韓国（ソウル）の百二十五か所で、計二百四十七公演を行った。

公演を始めて間もない七月。忘れられない出来事があった。東京ドームのナイターの試合前、観客にいわき産のトマトを配った。放射性物質は検査済みなのに、受け取る人は少なく、手の甲で払いのける人もいた。悲しかった。工藤さんの自宅周辺には農家が多く、トウモロコシやトマト、ナシの畑があったが、原発事故後、畑には雑草が高く生い茂り、ナシの木は切られていた。

「事故は終わっていない。まだ苦しんでいる人がいる。私はステージに立ち続けます。みんなの元氣と笑顔を取り戻したい。」

さやかは、やさしく手を取ってフラダンスを教えてくださいました。そして、あの震災の時のことも思い出した。

こわかった地震のこと。たくさんの家が流されておそろしかった津波のこと。父を家に残し母と弟の三人

□ アイナふくしま □

生きている限り  
なんども なんどでも  
人は立ち上がれる  
強くなれる 必ず  
決して忘れない  
あきらめない心  
笑顔で踏み出す  
新しい一歩  
ふと隣に目をやれば  
同じ気持ち抱いた仲間  
繋いだ手 離さないで  
輝く未来はきつとある  
アイナふくしま  
ここにしかない この場所  
アイナふくしま  
笑顔あかせよう もういちど  
今 心から 笑える幸せ  
かみしめて  
今を大切に 今を生きよう  
きつと乗り越えられる  
どんな高い壁も みんなで  
アイナふくしま この場所  
ここにしかない  
アイナふくしま  
笑顔あかせよう もういちど  
アイナふくしま  
ここから 明日へ 未来へ  
アイナふくしま  
ここから 明日へ 未来へ



で過ごした避難生活のこと。そして家に戻ってからの放射線量を気にする不安な日々のこと。

うれしかったこともある。それは、学校がはじまり、友達と再会できた時のこと。いろいろな方々が励ましのメッセージを届けてくださったったり、学校に来てくださったこと。そして、家にも学校にも、震災前と同じように、あるいはそれ以上に、明るい笑顔や元気な声があふれるようになったこと。一つ一つ思い出しながら、それらは決して忘れてはいけないことのように思えた。

父は、新聞をたたみながら言った。

「獅子舞の先生が、子どもたちが本気になって練習している姿を見ていると、未来は明るい、元気が出てくるとおっしゃっていた。祭りを見に来た人たちも、きっと同じように感じるのではないか。踊りは違っても、踊る人の気持ちが見る人に伝わるということは同じじゃないかな。」

工藤さんは、「アイナふくしま」を踊りながら、客席に向かって語りかける。そしてその思いが、たくさんの人に伝わっていく。

三匹獅子を踊る人の気持ち、見ている人に伝わるとは考えもしなかった。さやかは、自分の獅子舞が先生から何度も注意されてきた理由がわかった気がした。

「みんなに支えられ、元気になってきた私たち。地域の人たちが楽しみにしている獅子祭り、今度は私の元気を伝えたい……。ふるさとに、思いを込めて。」

三匹獅子舞を奉納する宵祭り、そして本祭りは、あと十日にせまっていた。



〔教材作成委員会〕作成



「ふくしま子ども宣言」作文コンクール

作品集

## めざすは、ぼくの水族館！

伊達市立保原小学校

六年 佐藤 雄騎

ぼくが、通っていた保原小学校は、去年の三月十一日の東日本大震災でこわれてしまいました。震災が起きる前から建て始まった新しい保原小学校が出来上がりましたが、前の大好きだった保原小学校はとりこわれ、もうなにもなくなってしまうました。だから、ぼくの夢は、元保原小学校跡地に水族館を作る事です。震災前に毎週いっしょに行っていた大好きな相馬の海の魚を集めて相馬の魚の大きなコーナーを作りたいです。震災前、ぼくは、相馬で釣ったり、あみですくったりした魚を三十種類以上育てていました。ぼくは相馬の魚に詳しい水族館の館長になりたいです。絶対になりたい。そして、いつかきつと相馬の漁も前みたいにかんになって、放射能の心配もなくなってぼくとお父さんとどんどん魚を集めて、水そうを魚でいっぱいにする「相馬の海水族館」それがぼくの夢です。

## 宇宙開発を目指して

福島大学附属小学校

六年 沖野 峻也

僕の将来の夢は宇宙開発に参加し、プロジェクトで活動することだ。宇宙開発はただ遠い星に行くことだけではなく、そのためにできた技術は、はば広く地球の役に立つのだ。地球にはない新たな資源を求めたり、宇宙から地球を観測することで、農作物などの影響を最小限に食い止めることもできる。

この夢を実現するため、僕はこれから三つのことを努力したい。一つ目は、常に自分の周りを整理整頓すること。宇宙探査はぼう大な情報になるため、大切な情報がなくならないように見やすく管理しなければいけない。二つ目は、困難にあった時、一つの視点だけでなく、様々な視点から見ること。小惑星探査機「はやぶさ」もこのようにして困難を乗り越えた。最後に国際人になること。宇宙開発をするには、多くの国と協力しなければ成り立たない。他の国をよく理解することも大切だ。これら三つのことをずっと続けていけば、二十年後にはきっと夢がかなっていると思う。

## 将来の夢

矢吹町立中畑小学校

六年 鈴木 蓮汰

多くの将来の夢は農業で福島県を元気にすることです。理由は二つあります。

一つ目の理由は、多くの家は農業をしています。小さいころから田植えやトマト作りの手伝いをしているのが楽しかったからです。

二つ目の理由は、同級生の中で野菜が苦手という人がたくさんいます。そういう人達に新鮮な野菜を食べてもらい本当のおいしさを分かってほしいと思うからです。ぼくが作った野菜などを野菜がきらいになっている人に食べてもらいたいので多くの将来の夢は農業をする人になりたいです。

そうすれば、福島県は復興復旧ができると思うので福島県から他県にひなした人もぼくが作った野菜を食べてもらおうことで福島県にもどって来てもらえると思います。そうすれば福島県産の野菜や魚はもう大丈夫だとアピールもできると思います。

## 保育士になるまで今できること

下郷町立江川小学校

六年 要 夏帆

私の夢は保育士になることです。

私は小さい子が大好きで小さい子や赤ちゃんをみると元気がでます。それに保育所は人を助ける仕事でもあると思うからです。仕事で子供がみられないという人もたくさんいます。それを助けるのが保育所だと思うから、私はこの仕事をやりたいと思いました。命をあずかる仕事なのでそれだけ責任をもってやるのが大切です。そのためにも人の気持ちになって行動したり、下級生のめんどうをみたりすることが今、私にできることだと思います。

私はこんな保育所をつくりたいです。それはお年寄りのデイサービスと保育所がいっしょになっていてお年寄りも小さい子がいっしょに遊んだり歌ったりできるので、時にはお年寄りが小さい子のめんどうをみます。保育士もお年寄りに昔のことを教えてもらいます。私はこの夢をかなえるためがんばります。

## 相馬野馬追を守る

南相馬市立大甕小学校

六年 佐藤 太亮

ほくの町には、「相馬野馬追」という歴史のあるお祭りがあります。小さいころは、野馬追行列しか見たことがなかったけれど、二年前に、ひばりヶ原で神旗争奪戦や甲冑競馬を見てから、かっこよさに感動して、大好きになりました。自分が育った町にこんな素晴らしいお祭りがあることをほこりに思っています。

今年、震災後、二年ぶりにいつも通りのお祭りが行われて、ほくは、家族で見に行きました。暑かったけれど、相馬の人たちの勇ましさを感じて、とてもうれしかったです。

ほくは、この伝統ある相馬野馬追祭りがこれからもずっと続いていくように、また、もっとたくさんの人たちに知ってもらえるように、守っていききたいと思っています。そして、いつか、馬にのって、野馬追にできることが、ほくの夢です。

## 被災地を笑顔に

福島市立庭坂小学校

六年 梅津 悠らら

私は東日本大震災で起きた津波の被災地に木や植物を植えて、緑豊かにして、みんなを笑顔にしたいです。なぜなら、浜通り地方の海側はいまだに震災直後のままで、修理もそうじもされていないからです。私は砂浜周辺にある、ごみや破片などを片付けるボランティアや周りに木や植物を植えるボランティアなどに参加したいです。

例えば、花言葉が「笑顔」や「明るい」などといった花を植えたりすると、それを見たみんなの心がほかほかして、あの恐怖の出来事が少しはやわらぐでしょう。避難している方々は、今もわすれられないと思います。だから、私が自然を増やし、それを見せることでみんなをハッピーに、笑顔にさせてあげたいです。もしも私も避難していたら、恐怖にたえられなかったと思います。しかし、花を見れば少しは気持ちやわらぎます。

将来、このようなことを全世界でもやって、世界中のみんなを笑顔にしていきたいです。

## 私はくじけない

南相馬市立大甕小学校

六年 大迫 滯奈

私は、東日本大震災を経験した一人として将来「命を救い守る」仕事に就きたいと思って居ります。

今まで体験した事のない大きな地震・津波によって、私は友達や親せきを亡くしました。そして考えもしなかった原発事故、その事故によって避難を余儀なくされた祖父が当時人工透析をしており、家族は祖父の透析を引き受けてくれる医療機関が見つからず苦労した事を今もって強く記憶にあります。

原発事故によって起きた放射線、目に見えない、臭いも無いだけに恐怖です。今後、ずつとつづくであろう放射線の検査、私達は健康でいられるのか不安でいっぱいです。

しかし、逃げられない現実なのです。誰よりも「命」の大切さを知る一人として将来、医療に関わる仕事に就き福島に住む人達の希望になれるように、そして友達や親せきを亡くした悲しみを背負い、たくさんの方の役に立てるようにがんばって行こうと思っています。

## 自分でできる事

南相馬市立大甕小学校

六年 川島 大知

ぼくの夢、それは小学校の先生になる事だ。もし先生になったら、大甕小学校につとめたいと思う。それは、自分の後輩達に、東日本大震災から学んだ二つの事を伝えていきたいからだ。

一つめは、命の大切さだ。南相馬市では、五百人以上の方が亡くなったそうだ。残念ながらその中に大甕小学校の児童もふくまれていた。校庭に植えられている五本桜の慰霊の意味と、命の大切さを伝え続けたい。

二つめは、助け合う事の温かさだ。震災直後、家に帰れなかったぼくを、避難させてくれた地域の方々、暗くて寒い時にはげましてくれた方々、たくさんの方の支援を送ってくれた全国のみなさん。ぼくは、こんなにたくさんの方に支えられている温かさを改めて感じた。

今も、避難生活は続いているが、自分でできる事は、しっかり勉強し、夢に向かってがんばる事だと思う。十年後二十年後の福島を支える一人になりたい。



## 福島をみつめて

須賀川市立第一小学校

六年 永田 さくら

福島の農業を大切にしていきたいです。その理由は、私もおじいちゃんのようにおいしいお米やお野菜を作ってみんなに食べてもらいたいからです。

私のおじいちゃん家は、農家で、いつもおいしいお米や新鮮な野菜を届けてくれます。

私は休みになると、時々おじいちゃん家<sup>ち</sup>に行き、一緒に種をまくのを手伝います。初めは、小さい苗でも日が経つとだんだん大きくなります。私は雑草をぬいたり、水をあげたりすることしかできませんが、おじいちゃん<sup>ち</sup>は毎日様子をみに行ったり肥料をあげたり自分の子どものように大事に育てています。

愛情のこもったお米やお野菜は、私たち家族に元気と笑顔をくれます。

農業は、天気にも左右されるので大変な仕事だと思えます。でも、食べてくれるみんなが笑顔でいっぱいになるように心のこもった食材を毎日の食卓に出せるように、農業の勉強をしたいです。

## 私にできること

いわき市立小川小学校

六年 志賀 明優

たくさんの方の命をうばい、たくさんの方の悲しみを生んだ東日本大震災から、二年半が経とうとしている。今、私にできることは何だろう。自分の使命は何だろう。

私は、夢に向かって努力したい。私の夢は、医者になること。病気で苦しんでいる人を笑顔にしたい。そして、震災の時にお世話になった全ての人々に恩返しをしたい。大震災が起こった時、私はたくさんの方に支えられた。いつもそばにいてくれた家族。避難する時、家へ迎え入れてくれた親戚。避難先で私を励ましてくれた先生。転入してきて、不安でいっぱいだった私と仲良くしてくれた友達。たくさんの方の支援をしてくれた日本中の人々。医者になって社会の役に立ち、感謝の気持ちを込めて、恩返しをしたい。

今、私は夢に向かって、何事も一生けん命に取り組み、少しずつ医者になるための勉強もしている。東日本大震災の事を、忘れない。そして、夢に向かって、精一杯努力したい。

## 広がる未来

石川町立石川小学校

六年 小豆畑 咲季

私の家は酪農家です。福島第一原発が爆発し、テレビで牛乳の出荷が制限されたというニュースが流れた時、今まで感じた事もないくらい、大きな不安でいっぱいになりました。今まで大切にしほってきた牛乳も処分しなければならぬし、お腹いっぱいエサをもらえなくなってしまう牛の悲しそうな鳴き声を聞くのが一番辛かったです。

でもそんな時、北海道の酪農家のみなさんから、大きなロール（干し草）が海を渡って届いたのです。何よりもうれしかったのは、そのロールにメッセージが書かれていたことです。お父さんが牛舎の入口にそのメッセージを貼りました。『頑張った分だけ未来は大きい』。

私たち家族がこの言葉にどれほど勇気をもらったかわかりません。未来はまだ何も決められていなくて、自分がつくり出していくものなんだということに気付くことが出来ました。私はこの恩を忘れず、人のために行動できる強い意志を持った人間になりたいです。

## ありがとう、先生と看護師さん

福島市立大森小学校

六年 亀田 有咲

三年前の震災当日、私は、浪江町に住んでいました。しかし、原発事故の影響で、次の日には、何一つ持たないまま、福島市、喜多方市と次々と場所を変えながら避難しました。

喜多方市のホテルに身を寄せた日の真夜中のことでした。兄が急性の胃腸炎になり救急車で病院に運ばれました。先生や看護師さんの素早い対応のおかげで、兄はすぐに落ち着きました。診察が終わると、私たちが避難してきたことを知った病院の先生と看護師さんは、仲間の看護師さんに連絡をとって、急いで私たちへ食べ物や洋服を持ってきてくださいました。朝方、病院の待合室で食べた、湯気の立ち上る、ほかほかのおにぎりのおいしかったこと、今でも忘れることができません。心も体も温まり、辛い気持ちを忘れることができた瞬間でした。私は、この日の出来事を今でも忘れることがありません。いつか社会に出たとき、人の心を温かく支えられるような人になりたいと強く思っています。

## ありがとうの気持ちを忘れない

福島市立福島第三小学校

六年 木下 渉

「ありがとう」

ぼくは、この言葉が大好きだ。なぜなら、言われた人はもちろん、言った人も笑顔になれるすてきな言葉だからだ。

ぼくは、普段から「ありがとう」という言葉をたくさん使うようにしている。友達に助けてもらった時や、先生や家族に分からないことを教えてもらった時、いろいろな場面で「ありがとう」という言葉が出てくる。

東日本大震災後、福島は世界中の人たちに助けもらった。震災から三年が過ぎた今も、福島の子どもたちのために、たくさんの方が支援してくれている。ぼくたちの学校にも応援の手紙が届いた。手紙と一緒に、どんぐりや松ぼっくりが入っていた。みんなで感謝の気持ちを込めて大切に使った。ぼくは、この時のうれしさを今でも覚えている。これからもきつと忘れることはない。ぼくは、この「ありがとう」という気持ちを大切にしていきたい。

## ありがとうの気持ちを忘れない

いわき市立平第三小学校

六年 菅野 絵理

「ごちそうさまでした。」私のクラスでは、給食の時間がおわると、お皿を片づけるために、みんな配ぜん台の横にならびます。私の番がくると、ほぼ毎日食缶には残飯があります。それを当たり前のように、私も残った物を捨てる必要があります。でもそれがどれだけぜいたくなことなのかを、私たちは三年前体験しました。

福島県は、三年前の東日本大震災でさまざまな被害を受けました。そんな福島に、給食さえ食べられない国も、支援物資を送って下さいました。その時、福島の人々は食料、水などがどれほど大切なものなのか改めて感じさせられました。

福島の子ども達はありがとうの気持ちを忘れず、そしてありがとうの気持ちをこめて、貧しい国を少しでも豊かにできるように努めます。また、将来復興を担っていく私たちが災害に負けない強い姿を見せるのも、支援して下さった方々へのありがとうの気持ちをしめすものだと私は思います。

## 「ありがとう」と伝えたい

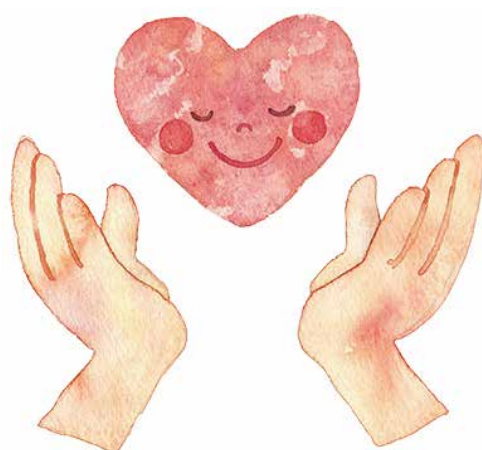
いわき市立渡辺小学校

六年 渡邊 桃香

私は、原発の事故により被災者になりました。避難当日は、何も持たずにバスに乗りました。一時間半くらいでつく所でしたが、町の人全員が町を脱出するために道路も避難所もいっぱい、避難指示が出てから、半日がたっていました。体育館の中は寒く、その日は新聞紙をかけて寝ました。

私が震災を経験して、名前もどこに住んでいるかも知らない人からたくさん物やイベントの招待などいろいろな支援がありました。また、私たちのことを思い、涙を流しながら話を聞いてくれる人もいました。

震災前は、他の人の愛を感じることもなかったし、どこかの被災者のことも他人事のようにしか感じていませんでした。この震災で、なくした物もたくさんありましたが、それ以上に多くの人、世界中の人に支えられ愛されていることを私は知ることができました。世界中の人たちに今、本当に大きい声で「ありがとう」と伝えたいです。



# ふくしま道徳教育資料集【小学校版】

---

平成29年2月

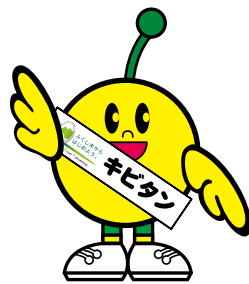
福島県教育委員会

〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16

印刷 有限会社 吾妻印刷

道徳教育総合支援事業（文部科学省）により制作しました。





福島県教育委員会

<http://www.gimu.fks.ed.jp/> (義務教育課)

リサイクル適性 **(A)**

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。